いきたい

太田 順一（おおた・じゅんいち）

1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校（現・ビジュアルアーツ専門学校 大阪）卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。主な写真集は、『大阪ウチナーンチュ』（ブレーンセンター）、『ハンセン病療養所 百年の居場所』（解放出版社）、『群集のまち』（ブレーンセンター）、『父の日記』（ブレーンセンター）など。著書に『ぼくは写真家になる!』（岩波書店）。

フォト・エッセイ

耕す人々 ①

写真・文 太田順一 Junichi Ota

農業で食べて

3K（きつい、汚い、格好悪い）仕事の代表のようにいわれてきた日本の農業――。
確かに就業人口は年々10万人ずつ減り続けていて、今では60歳以上が7割を占めるという衰退ぶり、高齢化ぶりだ。
しかし一方で、生き方として農業を選ぶ非農家出身の若者が、少数だが増えている。大木明佳（さやか）さんもそのひとり。
今春、2年間勤めた農場から独立して、大阪府高槻市の山間部にある畑で野菜づくりを始めた。

畑は家から車で20分ほどのところ。田んぼだったのをトラクターを借りてきて自分ひとりで耕した

「私、ぐうたら百姓ですから」

朝は早くに畑へ出るのですか、と尋ねると、大木明佳（さやか）さん（29）からそんな答が返ってきた。朝が弱いのだ。でもその分、夕方はいつも遅くまで仕事をする。

「十人十色。自分で考えて、自分に合ったやり方でやれるのが農業なんです」

大学生のとき、環境問題への関心から農業とであい、「自分で生き抜く力をつけよう」と百姓を志望。大阪・能勢の山中にある農業塾で2年間、合宿形式で学んだあと、農業法人で働く。そしてこの春、実家がある高槻で土地を借りて自分の畑をひらいた。

畑は1反5畝（せ）（15アール）。ひとりでやるに無理のない広さだ。少量多品種を方針としていて、夏場はキュウリ、トマト、ナス、カボチャなど15種を無農薬でつくる。手間がかかる野菜とそうでないのがあって、それをどう組み合わせて作付けするかがポイントだそうだ。

「これでよし、はないですね。失敗が多くて、日々勉強です」

しんどい作業も全然苦にならない。手をかけたらかけただけ野菜は応えてくれるからだ。それに、勝った負けたと競争にくれる世間から離れていられる。

ただ、ふと現実問題がよぎる。時間給で計算をしたら、萎えてしまうような金額なのだ。果たしてこれで食べていけるのだろうか——。

“ぐうたら”を自称するおおらかな大木さんだが、笑いながら胸のうちを明かした。

「農業を選んだ生き方と矛盾するようですけど、ジャンボ宝くじ、当たらないかな、って」

まだ始まったばかり。課題はいっぱいあるが「できへんかったらできへんで、しゃあないなあ」

今春、独立をした。誰に何をいわれるわけでなく、疲れたら家に帰って休んでもいい。ああ、自由！

大学の卒論のテーマは農業。初めは外国の環境や貧困の問題に関心を寄せていたが、自分の足元をこそもっと知らなければと、日本の農業の問題に目を向けるようになった

集荷所は畑のすぐ近くにある。朝摘みした野菜をここに運んで袋詰め作業をしたあと、再び畑へ

昼食はいつも集荷所の女性と一緒にとる。彼女とのおしゃべりがくつろぎのひととき